

板谷沢右俣

シラネ、カミ、和
一九八五年八月三一日

板谷沢左俣の遡行を終え、いった

ん二俣まで戻る。時間を見たら、まだ余裕があるので、右俣の調査に移る。

右俣に入って一分と進まないうちにナメ滝に出くわした。左俣が花崗岩であったのに、こちらは凝灰岩である。滝は大きなものはないが、小滝がいくつも出てくる。

一条の筋となって落ちる三段の滝を通過する。その後も二ヶ前後の滝が続き、沢水のきれいな源頭部まであきない遡行が楽しめる。源頭部は、左俣と同じく、稜線まで一気に突き上げていた。

今日は、小さいが多くの滝の出現

大沢

一九八三年一〇月二十九日

朝方天候が一時良くなったので、軽い沢登りを楽しもうと茂庭に向かっていたら、途中から小雨が降ってきた。引き返す気にもならず、雨具をつけて大沢をめざす。

板谷沢林道入口に車を止めて、大沢出合へと歩く。一〇分程で出合着。右岸にだいぶ荒廃の進んでいる林道があるので、しばらくはそれをたど

により、予想以上に楽しい遡行だった。満足して帰路につく。

(記・一)

「タイム」二俣(一五:二五)↓右俣
終了(一五:五〇)

る。沢の兩岸にはスギやアカマツが植林されている。

林道終点から沢に入る。すぐにナメも終わり、ヤブコギの沢登りとなる。湿地の中を沢が流れている所を過ぎると二俣となる。ここに七ヶ宿方面への道があった。

右俣に入る。所々ナメが出てくるが、水の流れはもうチョロチョロで

ある。水が濁れた所で沢から上がり、造林地の中を一分程のヤブコギで尾根に出る。

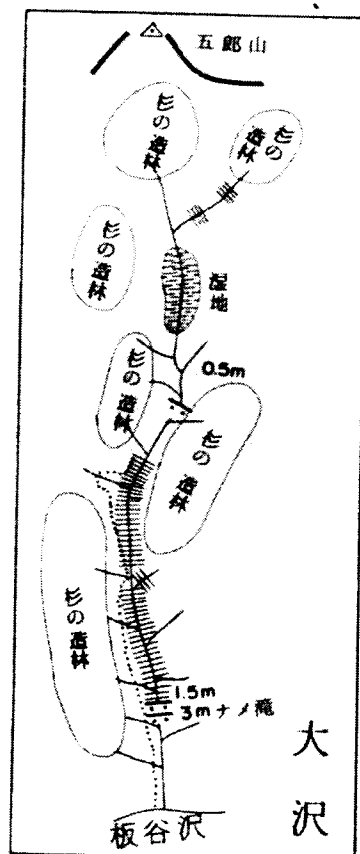
(記・タム)

「タイム」 大沢出

合(一一・四五)↓林道終点(一二・

二〇)↓二俣(二三・〇五)↓尾根

(二三・二五)

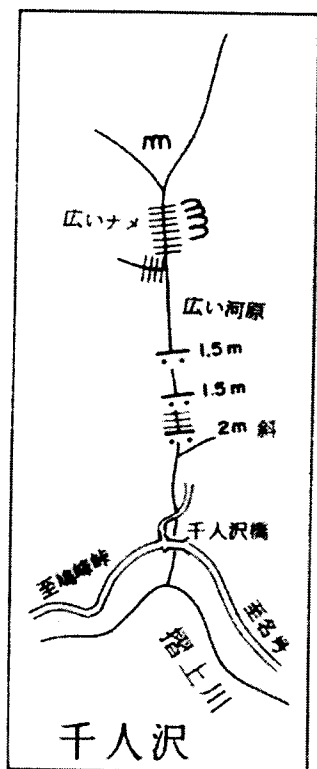


千人沢

一九八五年七月二日

仕事を終えて出発。目的の千人沢は、後沢にかかる落合橋のひとつ手前の沢である。橋に千人沢と書いてあるので、間違うことはない。しかし、あまりにも小さな沢である。橋を降りて遡行を開始するが、す

ぐに林道が横切り、沢はヒューム管の中に入ってしまう。しかたなく林道に上がり沢をさがすが、幅一程のこの沢は、刈り払いた



枝の下で歩けるものでない。ヤブをこぎながら登ってゆくと、ようやく広い河原に出た。一部伏流となり、至る所にクマカカモシカの大きな足跡が残っていて、気分の良い沢ではない。顕著な二俣を右に入り、稜線が見えてきた所で、ヤブもひどいので遡行終了とした。二俣手前のだいたい色の広いナメがこの沢唯一の収穫。沢登りの対象としてはあまりにもおそまつである。(記・タム)

「タイム」 千人沢橋(二三・五〇)↓遡行終了(二四・二〇)